

残したい 想いと風土



高山市

飛騨漆の森プロジェクト 理事長
本母 雅博さん

飛騨匠のDNAをひきつぐ

ものづくり文化を守るためにも

再生させた漆の森を

未来へ循環させていきたいな



漆の森を未来へ

高山市に生まれ育った本母雅博さんは、高校卒業後に就職した家具製造会社「飛騨産業」で、技術や商品の開発に長年携わったのち、取締役のひとりとして改革や改善を進めました。

こうして飛騨の木工に関わる中で、さまざまなものづくりの原料として使われる、地元産の漆が減少していることに直面しました。

そこで、これからも漆を利用していくために「漆の森プロジェクト」を立ち上げ、さまざまな業種の仲間と協力しながら漆を育て始めました。

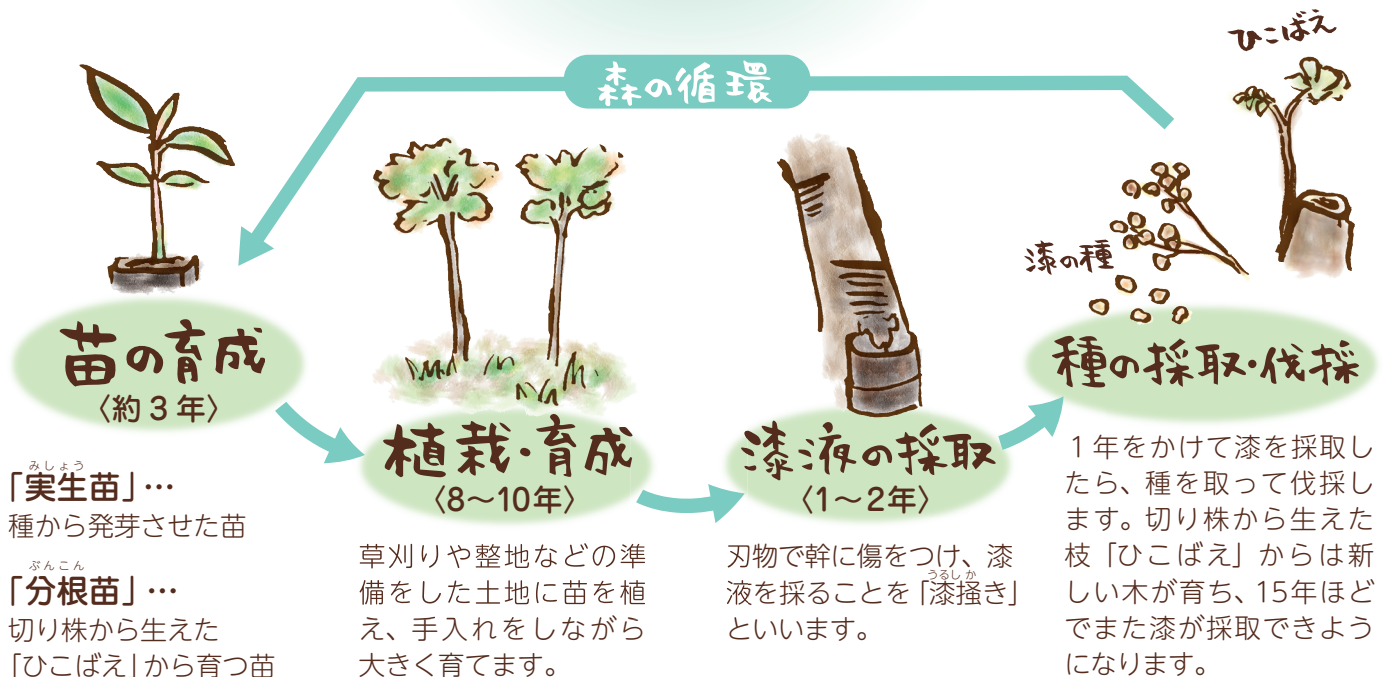
伝統文化を守ることはもちろん、新しいことにも挑戦しようという思いを持って活動しています。

飛騨漆の森プロジェクト



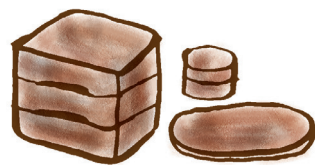
愛称は「ひだうるP」

飛騨のものづくりを未来まで支えていくため
持続的に森を育てる活動です



漆のさまざまな活用

伝統的な塗りの原料としてだけではなく
多くの可能性を秘めています



しゅんけい

飛騨春慶

木目を活かして漆を塗る
飛騨の伝統的工芸品



祭屋台

ごうかひんらん
豪華絢爛な

高山祭の屋台にも
漆が使われています。



漆の芽の天ぷら

漆の芽は食べられます。
タラの芽によく似た味。



漆ろうそく

漆の実から採れる
ろうから作られます。



飛騨の家具

飛騨は家具作りがさかん。
漆で仕上げる
製品もあります。

飛騨匠文化と漆

ひだのたくみ

奈良時代から、高い技術
を持つ飛騨の職人は都へ派
遣されてきました。この「飛

騨匠」の精神は、現在もこ
の地域のものづくり文化に
受け継がれています。

しかし近年、高山祭の屋
台や伝統的工芸品「飛騨春
慶」などに欠かせない原料
の漆が、地元で採れなくな
り、輸入に頼らなければな
らなくなってきました。

漆の森を作ろう

原料が採れない場所では、
技術が育たず伝統は消えて
しまう。そんな危機感から
始まったのが「飛騨漆の森
プロジェクト」です。

ほかの産地ではどのよう
に漆を育てているかを調べ

たところ、身近な里山で育
つことがわかりました。実
際に挑戦を始めると、使っ
てない山や畑を提供してく
れる人も現れました。

プロジェクトを始めて2
年目にはNPO法人を作り、
漆を共通の財産として公平
に使える仕組みを作りまし
た。山で働く人や職人など、
同じ考えを持ったメンバー
が集まり、漆の森を守って
います。

活動する中では、うまく
いかないこともありました。
しかし、試行錯誤を重ねた
ことで知識が増え、「こうい
う土地だから、こう育てよ
う」と対応できるようにな
りました。

「どんな経験も財産にな
る」という前向きな思いを
持って、漆の持続的な生産
を目指しています。

いま、
伝えたいこと



〔文・絵〕
大森貴絵
高山市

漆のことを若い人たちに伝えるときは、実際に現場へ来て、
どうやって漆が育つのかを知ってもらいたいなと思っとる
よ。体験は財産！ ぜひ漆の森を見に来てほしいな。
伝統的な漆塗りを大切にしつつ、今までにない技術を開発す
るのも面白いんじゃないかな。「温故知新」の精神で、伝統
文化をそのまま引き継ぐだけでなく、新しいことにもチャレ
ンジしたいと思っとるよ。